

独創・挑戦・誠實 一時代の波動を浴び
テクノロジーを結び 社会の課題を解き 祖業を進化させる一



AIZAWA 會澤高圧コンクリート株式会社

會澤 祥弘 (あいざわ よしひろ) 社長 <2013年10月1日賛助会員入会>

【会社概要】

本 社—北海道苫小牧市若草町3丁目1-4
設 立—1963年[昭和38年]10月1日
資 本 金—6,390千円
従業員数—610名(令和5年9月現在)
売 上 高—213億円(令和5年3月期)

【主な事業内容】

○プレキャスト/プレストレストコンクリート事業
○レディミクストコンクリート事業
○コンクリートパイル事業
○住宅用プレキャスト基礎(ΣBase)事業
○脱炭素系マテリアル事業(Basilisk/CarbonCure)
○デジタルクローン建築事業
○航空ロボティクス事業
○浮体式洋上風力事業

今回の会員企業トップインタビューは、コンクリート材料に様々なテクノロジーを掛け算し、つねに新たな企業価値を生み出す会社、會澤高圧コンクリート株式会社 會澤 祥弘社長に伺いました。

同社は、1935年(昭和10年)に創業し、創業者「會澤芳之介」氏の遺訓に従い、祖業の軸をぶらすことのない経営を追求し続けています。2020年にはバクテリアの代謝の力でひび割れを自ら修復する「自己治癒コンクリート(Basilisk)」の量産化に世界で初めて成功し、本年1月には第9回「ものづくり日本大賞」の「優秀賞」を受賞しています。

Q. 貴社の創業の経緯・沿革をお聞かせください。

A. 当社は1935年、静内町で會澤コンクリート工業所として創業し、コン管、セメント瓦等の製造販売からスタートしました。1952年の十勝沖地震ではセメント瓦事業を停止に追い込まれるなど、多くの苦難も経験しました。1963年、ヒューム管工場の落成を機に、現在の會澤高圧コンクリート株式会社を設立。総合コンクリートメーカーを目標に、設備投資も積極的に行い、1970年代からは高速自動車道、発電所、ダム、自治体工事に加え、海外での事業展開にも携わるなど、多くの実績を積み重ねてきました。

並行して研究開発にも力を注ぎ、2000年には複数の小型無人プラントをインターネットで制御する、世界に例のない生コン供給モデル「OOPS!(ウップス)」を開発。2009年には「アイザワ技術研究所」を立ち上げました。そして本年、研究と開発と製造を一体不可分に回す次世代中核施設として「福島RDMセンター」を誕生させるに至っています。

Q. 貴社の経営方針、経営者として重視していることについてお伺いいたします。

A. 当社を創業した會澤芳之介の「コンクリート以外はやるな」という遺訓の意味を深掘りし、祖業の軸をぶらさずに独創的であり続けることに腐心して来ました。その結果、コンクリートという素材に最先端のテクノロジーを掛け算することで、新たな企業価値を生み出す独特の経営スタイルを確立するに至りました。2000年4月に経営理念を、「独創」Innovate「挑戦」Challenge「誠實」Trust、に全面刷新し、30代の若手を中心に編纂したアイザワフィロソフィーの前文において「規格大量生産との決別」

を宣言したことが、イノベーション集団へと転換しつつあるベースになっています。

Q. 「福島RDMセンター」の誕生に至った背景や施設の特徴点などについてお聞かせください。

A. 2000年に「独創」を掲げ、その後、研究開発部門も立ち上げましたが、自社のリソースだけで研究を進めても限界があります。イノベーションの本質は複数の要素技術を今までになかった組み合わせで結合させることにあると気づき、外とのコラボレーションをする仕組み作りが必要と考えていました。

コンクリート事業を北海道というステージだけではなく、全国さらには海外にも視野を広げていく必要があるとも捉えていました。

そのような中、福島県の浜通り地区に、原発事故からの復興を目指す「福島イノベーションコースト構想」があることを知りました。イノベーションを軸に一度失った地域を別の形で取り戻そうとする試みに、我々の未来を重ね合わせたのです。

イノベーションは研究と開発だけでは誕生しません。プロトタイプされた試作の量産化技術の開発を並行して進め、大規模に社会に実装できるようになって初めて



福島RDMセンター研究棟



福島RDMセンター工場棟

イノベーションと呼べるのです。研究と開発と製造を一体不可分に回すオープンイノベーションの戦略拠点として「福島RDMセンター」を創設した理由です。

Q. 「自己治癒コンクリート」の特徴点についてお聞かせください。

A. コンクリートの最大の弱点であるひび割れを生物の代謝機能を使って自動的に治るようにし、コンクリートを壊れない素材へと進化させる画期的な技術です。まずバクテリアを乳酸カルシウムのなかに封じ込めてコンクリート中に配合します。ひび割れで水と酸素が供給されると活性化して、バクテリアは乳酸カルシウムを食べて炭酸カルシウムを出す。これでひび割れ部分だけを自動的に塞いでいく仕組みです。デルフト工科大学とのコラボによって、世界発の量産化に成功しました。今年だけで出荷量は三万トに迫る勢いです。

普及に拍車がかかってきたのは、当社が自己治癒技術の利用を全国の同業他社にも開放し、社会インフラの超高耐久化を通じて、脱炭素に取り組むことを呼びかけたことが背景にあります。コンクリートの主要材料であるセメントは大量のCO₂を出してしまいます。通常50年前後で作り直さなければならぬコンクリート系インフラをこの技術によって一世紀以上使い続けられるようになります。長期的な観点に立って、脱炭素化を着実に進めることができるのです。



自己治癒コンクリート Basilisk 製造設備

Q. コロナ禍前の日常に戻りつつありますが、コロナ禍の影響は如何でしたでしょうか。

A. 当初は、建築系を中心に事業への影響が相当あると考えていましたが逆でした。リモートワークが増えたことで住まいのあり方が見直され、むしろ住宅需要は底堅く推移しました。

社員に対しては、感染拡大当初に一度だけ、この災禍は3年以上の長期に及ぶこと、状況の変化に応じて適宜自己判断するよう指示しました。リモートか出勤かも含めて今日に至るまで社員の自己判断に任せています。

Q. 貴社の社風、社員気質などはどのように感じておられるでしょうか。

A. 1998年に新聞社を退職し、同年、アイザワグループに入社したのですが、まず取り組んだのが業務改革です。日本ではまだ珍しかった執行役員制度をいち早く取り入れ、取締役と執行者を分離することで若手を大胆に登用するテコにしました。まだ30代だった私がCEOに就いて本部制を導入し、OOPS！を開発、そして新たな経営理念を若手主導で樹立したことが、大きな転換点になったと思います。

またM&Aを積極的に行ったことで多様な人材が揃ったのも当社の特徴です。M&Aされた側の社員が萎縮することなく、むしろプロパーよりも大胆に挑戦できる風土が醸成されてきたものと受け止めています。

Q. 北海道は全国に先んじて人口減少が進み、労働者不足も顕在化しています。人材確保、人材育成方針についてお聞かせください。

A. 弊社では、大学卒を春に定期採用することへのこだわりがありません。ひとを取りに行くというより、「来るもの拒まず、去る者は追わず」を徹底しているからです。

相手から興味を持たれ、好かれる存在になることが基本です。中途の採用も多いですし、一度退社して他社を経験した後に戻って来る人も珍しくありません。コンクリートの分野だけではなく、他分野からも採用していますし、外国人にも広く門戸を開いています。ミャンマーでは、ヤンゴン工科大の先生に一声かけて100名ほどの生徒を集め、一気に直接面接して本社採用するケースもありました。

採用はもっとクリエイティブであっていいと思っていますし、人と人の出会いは、いろんな形があっていいと考えています。アクセスしてきた方たちが、気後れせずにノックできる体制だけはきちんと整備しておく必要があると思います。

教育については、コンクリートのエンジニアを育てる1年間のアカデミーを設けており、既に30名以上が卒業しています。このアカデミーは、技術の教育だけではなく、部門横断的であったり年次の違う方が参加しますので、人間関係を学ぶ塾のような存在になっています。

ただ、人を育てるのは、マネジメント能力の向上を含め、実践に勝るものではありません。意欲のある若手に重い荷物を背負わせること。これが一番です。



事業風景(3Dプリンター)

Q. 働き方改革や女性の活躍に関する取り組みについてはいかがでしょう。

A. 働き方の変革も自主的に仕事に取り組むなかで見出すことが必要と思っています。ある意味、新型コロナウイルス感染症がそのことを考えさせ、実践する良い機会であったと思います。どういふスタイルで働いたら一番パフォーマンスを発揮できるか、自分で自分の仕事を設計する必要があるのです。今は、昔のようにルーティーンワークを繰り返す仕事のスタイルはまったく通用しないからです。

男性がありとあらゆる分野で社会の中核を牛耳っている今の日本に強い違和感を抱いています。多様性の時代に、同じ方向を向き、同じことをやるオジサンたちが第一線を退かないから、日本は変わらないのだと思います。男性3、女性3、外国人3くらいのバランスを戦略的につくり出し、お互いの強みを引き出せる組織づくりが理想だと考えます。



札幌支社外観

Q. 貴社の課題、今後の取り組み・方向性についてお聞かせください。

A. GHG(温室効果ガス)のサプライチェーン排出量を2035年までに実質ゼロとする取り組みは、業界を引っ張っていく立場にもありますので、確実に達成します。非常に厳しいコミットメントであり、まだまだテクノロジーが足りませんが、今、取り組んでいる一つに蓄電コンクリートがあります。MIT(マサチューセッツ工科大学)と連携し、研究段階から実用化へと進め、自己治癒コンクリートと双璧を成す脱炭素系素材に育てる考えです。コンクリートは成熟素材ではなく、今、最も変化をし、変化を求められてもいる素材です。その変革の最前線に立ち続けるつもりです。

Q. 特に印象に残る仕事・事柄をお聞かせください。

A. OOPS!を軌道に乗せるまでには本当に紆余曲折がありました。規制を盾に抵抗してくる勢力と戦い2年間の工場停止に追い込まれたことなどは非常に辛い思い出です。その時をともに乗り越えた社員との絆が、今の礎になっています。